

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	藏 田 彩
------------------	-----	-----	-------

[論文題名]

Instructing females to wipe their vulva after bowel movements is unnecessary to prevent cystitis: a short research report

[題名和訳]

女性の排便後外陰部清拭の指導は膀胱炎予防になるのか

雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年

International journal of Urological Nursing, Volume 10, Issue 3, pages 173-175, November 2016

著者名

Saya Kurata, Mitsuru Noguchi, Shohei Tobu, Masaharu Nanri, Yoko Daisuke, Norito Takagi, Koji Nakamura and Jiro Uozumi

[要 旨]

【目的】 女性の排便後外陰部ケアは膀胱炎の予防から尿道側から肛門側へ行うよう幼少時から指導されている。しかし、それを支持する研究はない。そこで、女性の単純性膀胱炎発症と排便後外陰部ケアとの関連について調査した。

【対象】 単純性膀胱炎と診断された女性患者 171 例：16～84 歳（中央値：64 歳）を膀胱炎群。尿路感染症の既往のない物および数年間膀胱炎罹患を認めない女性 103 例：23～90 歳（中央値：67 歳）を対照群とした。独自の質問票を用いて排便後の外陰部ケア法、トイレ様式、ADL, 基礎疾患の有無、身長・体重について調査を行い、単純性膀胱炎との関連を解析した。

【結果】 排便後外陰部ケアを肛門側から尿道側に行っているものは膀胱炎群 48 例(28%)、対照群 29 例(28%)で有意差は認めなかった (P=0.988)。またトイレ様式 (P=0.056)、ADL (P=0.666), 基礎疾患の有無 (P=0.396)、BMI (P=0.38) に関しても膀胱炎群、対照群との間に有意差は認めなかった。排便後外陰部ケアの方法は年齢にのみ有意差を認めた (P=0.023)。

【結語】 伝統的に女性の排便後外陰部ケアは尿道側から肛門側に行うように指導されている。しかし、今回の結果からは外陰部ケアと単純性膀胱炎の関連は認めず、膀胱炎発症の危険因子は外陰部ケアにはなく、その他の因子が関与していると考えられた。

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	前田 美由紀
<p>[論文題名]</p> <p>Study on rectal administration of azithromycin by suppository for pediatric use. 小児への適応に向けたアジスロマイシンの坐剤による直腸内投与の検討</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Int. Journal of Clinical Pharmacology and Therapeutics, 54(4), 263-268, 2016</p> <p>著者名 M. Maeda, Y. Nakano, T. Aoyama, Y. Matsumoto, H. Fujito</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目 的】 小児科領域ではアジスロマイシン (AZM) の小児用細粒がマイコプラズマ肺炎に対して汎用されているが、患児が内服後に嘔吐する場面に度々遭遇する。そこで今回、新しく AZM 坐剤を調製し、その臨床応用への可能性について検討を行った。</p> <p>【方 法】 2010年10月1日からの1年間に佐賀大学医学部附属病院を受診した15歳未満の呼吸器感染症例を対象とし、抗生物質の投与状況を電子カルテより調査した。 AZM 坐剤はジスロマック®錠の粉碎末を用いて調製した。健常成人に対して直腸内投与し、ジスロマック®錠を経口投与した場合のAZMの血清中濃度と比較した。AZM の血清中濃度はHPLC-ECD 法により測定した。</p> <p>【結果 および 考察】 ジスロマック®小児用細粒を飲めない原因として、ジスロマック®の苦味のほかに、強い咳により嘔吐してしまう例が多かった。そこで、新たな剤形として坐剤を考え、AZM 坐剤の調製を検討した。まず、坐薬の基剤として油脂性と水溶性基剤について検討した。in vitro の溶出試験では水溶性基剤の方が溶出率が高かったが、基剤のみの使用性試験の結果、水溶性基剤の方が刺激性が強かったため、AZM 坐剤には油脂性基剤を用いることとした。この AZM 坐剤を健常成人 4 名に投与し、経時的に血清中濃度を測定して薬物動態パラメータを求めた結果、直腸内投与時の相対的生物学的利用率は経口投与時の 20.3% であった。AZM 坐剤の投与による重篤な有害事象の発現は認められず、AZM 坐剤を小児へ応用できる可能性が示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	馬場才悟
<p>[論文題名] Relationship between pulmonary function and elevated glycated hemoglobin levels in health checkups : A cross-sectional observational study in Japanese participants.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of epidemiology, Vol.27, No.11, 2017</p> <p>著者名 Saigo Baba, Tooru Takashima, Miki Hirota, Michihiro Kawashima, Etsuo Horikawa</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 本研究は、日本において、慢性閉塞性肺疾患（以下 COPD）の診断を受けていない特定検診受診者の呼吸機能と空腹時血糖値、HbA1c との関連を明らかにすることを目的とし、COPD 早期発見のための知見を得たので報告する。</p> <p>【方法】 特定検診受診者（2013年8月～2014年3月）のうち、COPD 未診断で、重度の呼吸器疾患やアレルギー性疾患、気管支喘息のある人を除外した 1019 名を対象とした。受診時にスパイロメトリーによる呼吸機能検査を行い、1 秒率を算出し、受診で得られた血液生化学データをもとに分析を行った。</p> <p>【結果】 空腹時血糖値、HbA1c が基準値を超えていた人たちは、1 秒率が有意に低下していた。また、呼吸機能検査で 1 秒率が 70%未満であるのは、年齢が 60 歳以上、HbA1c が 5.6%以上、喫煙者あるいは喫煙歴がある人で有意に多かった。</p> <p>【考察】 日本では、未だ COPD の診断率が低い状況である。本研究の結果、1 秒率が 70%未満の人たちは、HbA1c が高い傾向を示しており、予防医学と COPD 早期発見の観点から、高齢で、喫煙歴があり、特に HbA1c が基準値を超えていれば、スパイロメトリーによる呼吸機能検査が必要だと考えられる。</p> <p>【結論】 日本における特定健診の中で、HbA1c が基準値より高く、高齢で喫煙者あるいは喫煙歴がある人にスパイロメトリーによる呼吸機能検査を推奨することは、COPD の早期発見につながることを示唆された。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	蒲池 紗央里
<p>[論文題名]</p> <p>Sarcopenia is a risk factor for the recurrence of hepatocellular carcinoma after curative treatment</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Hepatology Research 46巻, 201-208頁, 2016年</p> <p>著者名</p> <p>Saori Kanachi, Toshihiko Mizuta, Taiga Otsuka, Shunya Nakashita, Yasushi Ide, Atsushi Miyoshi, Kenji Kitahara, Yuichiro Eguchi, Iwata Ozaki, Keizo Anzai</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的; 近年, サルコペニアと予後との関連性が各疾患で検討・報告されている. 肝疾患においても肝硬変患者の予後規定因子として報告されている. 今回, 肝癌患者において治療後再発率との関連性を後ろ向きに検討した.</p> <p>方法; 初発の C型関連肝癌患者のうち, 肝切除もしくは経皮的ラジオ波焼灼術で根治を確認した Child-Pugh class A の症例を対象とした. サルコペニアの評価を筋肉量で行い, L3SM (the third lumbar skeletal muscle index) を使用した. Cut-off 値 (男性: 52.4cm²/m², 女性: 38.5cm²/m²) 以下をサルコペニア群とした.</p> <p>結果; 対象患者は 92 名 (サルコペニア群 61 名). 1, 3, 5 年再発率は, サルコペニア群で 39.1%, 77.1%, 81.7%, 非サルコペニア群で 23.5%, 59.5%, 75.7% であり有意にサルコペニア群で再発率が高い結果 (<i>p</i> 値=0.03) であった. 再発率に寄与する因子の多変量解析ではサルコペニアと術前 AFP 値 > 40ng/ml が抽出された.</p> <p>考察; サルコペニアの診断基準は未だ明確でなく本邦での更なる検討が必要である. また肝発癌の関連性については未だ不明な点が多く, 栄養・運動療法により筋減少症を改善させ, 予後改善効果が望めるかどうか追加検討が必要である.</p> <p>結論; サルコペニアは根治治療後の肝癌患者において再発のリスク因子と考えられる.</p>			
<p>備考 1 論文要旨は, 600 字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	忌部 航
<p>[論文題名]</p> <p>Validation of the American Gastroenterological Association guidelines on management of intraductal papillary mucinous neoplasms: More than 5 years of follow up</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 European Radiology 2017 Aug 2. doi: 10.1007/s00330-017-4966-x. [Epub ahead of print]</p> <p>著者名 Koh Imbe, Naoyoshi Nagata, Yuya Hisada, Yusuke Takasaki, Katsunori Sekine, Saori Mishima, Akihito Kawazoe, Tsuyoshi Tajima, Takuro Shimbo, Mikio Yanase, Junichi Akiyama, Kazuma Fujimoto, Naomi Uemura</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究の目的 2015年に米国から示された腫瘍性膵嚢胞のガイドラインでは、画像上低リスク群は5年間の経過観察において著変なければ検査を終了して良いとされる。本ガイドラインの妥当性を検証することを目的とした。</p> <p>方法 膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) と診断された患者を対象に後ろ向きコホート研究を行った。研究1はIPMNと診断されかつ1年以上の経過観察がおこなわれた患者392例を対象に高リスク群と低リスク群に分け、膵がん発生と死亡率の違いを検証した。研究2では5年間の経過観察中に変化のなかった低リスク群159例を対象に膵がん発生と死亡率を検証した。</p> <p>結果 研究1では高リスク群の27.3%で膵がん発生を認めたのに対し、低リスク群では認めなかった($p<0.01$)。死亡率は高リスク群では25%で、低リスク群では8.3%のみであった($p<0.01$)。経過観察の中止が推奨される患者群を対象とした研究2では3例(1.9%)が膵がんを発症した。</p> <p>考察 低リスク群患者をどのように経過観察すべきかは十分なデータがなく、あまり議論がなされていなかった。本研究では非常に多くの症例を長期間観察し得、今後の議論の一助になると考える。</p> <p>結論 膵がん発症や死亡率は低リスク群では有意に低く、リスク分類は妥当と言える。しかし少数例ではあるが経過観察を中止する群から膵がんが発生していることから、経過観察の中止は再検討されるべきである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	松本 圭一郎
<p>[論文題名]</p> <p>Long-term Outcomes of Tonsillectomy for IgA Nephropathy Patients. : A Retrospective Cohort Study, Two-center Analysis with the Inverse Probability Therapy Weighting Method</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Nephrology (Carlton), Epub ahead of print, 2017</p> <p>著者名 Keiichiro Matsumoto, Yuki Ikeda, Sae Yamaguchi, Mai Sanematsu, Makoto Fukuda, Tsuyoshi Takashima, Tomoya Kishi, Motoaki Miyazono, Saori Uchiumi, Mai Yoshizaki, Yasunori Nonaka, Ryoko Matsumoto, Akiko Kanaya, Kenichi Fukunari, Yuji Ikeda</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: IgA腎症に対する扁桃摘出術の効果は未だ議論がある。本研究では、扁桃摘出術（以下、扁桃摘）がIgA腎症の予後（末期腎不全もしくは死亡）にいかに関与しているのか、扁桃摘群と非扁桃摘群を比較し検討した。</p> <p>方法: 佐賀大学医学部附属病院と佐世保共済病院にて腎生検を受け、IgA腎症と診断された患者を対象とし、診療録を基に全データを収集する。227名が研究対象に選出された。患者年齢（中央値（四分位範囲））は34歳（25-43歳）、観察期間は92か月（40-178か月）であった。主要評価項目は末期腎不全と全死亡とした。統計学的解析手法は、Propensity Scoreを用いてInverse Probability Therapy Weighting (IPTW) 法とマッチング法によるCoxハザード解析を行った。さらに軽症群を抽出して同様の解析を行った。</p> <p>結果: 全例を用いた解析では扁桃摘群と非扁桃摘群でどちらの手法をもちいても予後に有意差を見出すことはできなかった (IPTW and matching, HR: 0.40 (0.12-1.36) P = 0.072 and 0.78 (0.13-4.64) P=0.786)。しかし、軽症群を抽出した解析では、有意差をもって扁桃摘群に予後良好な傾向がみられた (hazard ratio (HR), <0.001 [CI<0.001-<0.001, P = 0.039])。</p> <p>考察: 以前から軽症群に早期に扁桃摘を行うことで、予後が良好となる可能性は示唆されていたが、本研究で実臨床で確認することができた。</p> <p>結語: 今回の研究ではIgA腎症は増悪前に、早期に扁桃摘出術を施行することで死亡や末期腎不全を回避しうる結果を得ることができた。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	明石 道昭
<p>[論文題名]</p> <p>Assessment of tumor aggressiveness of rectal cancer using 3-T MRI: correlation between the apparent diffusion coefficient as a potential imaging biomarker and histologic prognostic factors</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Acta Radiologica, vol.55(5), 524-531, 2014</p> <p>著者名 Michiaki Akashi, Yuji Nakafusa, Tomomi Yakabe, Yoshiyuki Egashira, Yasuo Koga, Kenji Sumi, Hirokazu Noshiro, Hiroyuki Irie, Osamu Tokunaga, Kohji Miyazaki</p> <p>[要 旨]</p> <p>背景: 近年、MRI による拡散強調画像 (DWI) が、腫瘍の悪性度評価に有用であるとす る報告がなされている。</p> <p>目的: 放射線化学療法を受けていない患者における直腸癌の ADC 値が、組織学的予後因 子との関連において非侵襲的な悪性度の指標となりうるかを評価する。</p> <p>対象と方法: 術前に 3T-MRI で DWI を含む撮影を行った 40 人の直腸癌患者を対象とした。 全ての患者が術前放射線化学療法を受けていない。ADC 値の平均値を測定し、以下の因 子と比較した。(術前 CEA 値、術後再発等の他の MRI 因子、以下の組織学的因子: 浸潤 距離、T-stage、MRF 浸潤の有無、分化度、N-stage、リンパ管・静脈侵襲の有無)</p> <p>結果: ADC の平均値は腫瘍の組織学的分化度と有意に相関した。それ以外の因子 (CEA 値、T-stage、N-stage、MRF 浸潤の有無、リンパ管・静脈侵襲の有無、局所再発の有無 とは有意な相関がみられなかった。</p> <p>考察: 本研究は進行直腸癌の予後因子と 3T-MRI による ADC 値の関係を調査した初めて の研究である。腫瘍の組織学的間質成分の違いや、腫瘍関連リンパ球 (TIL) 浸潤などが ADC 値に影響を与えている可能性があり、相関が得られなかった理由と考える。</p> <p>結論: 術前化学療法を行わなかった進行直腸癌症例において、3T-MRI による平均 ADC 値と腫瘍の組織学的分化度は有意に相関した。ADC 値は進行直腸癌の予後予測において、 imaging biomarker としてある程度の情報を与えることができる。しかしそれ単独では組 織学的情報に置き換わることは出来ない。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。